# 東日本大震災とミュージアム

仙台・宮城ミュージアムアライアンス

# はじめに

２０１１年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災は、地震、津波、原発事故などの被害の規模や内容が、広域にわたって複雑に絡み合うことにより、被害のありかたは地域ごとにきわめて複雑な様相を呈した。原発事故の影響などいまだに進行形の被害もあり、その全体像を把握することは4年を経た時点でも困難な状態である。私たちの社会が直面した、このようなある種の極限状態の中で、ミュージアムに何が起きたのか、何を失い、何を学ぶことができたのか。それをあらためて振り返ることで、これからのミュージアムが社会のなかで果たすべき役割を、もう一度しっかりと把握できるのではないかと考える。

仙台・宮城ミュージアムアライアンス（ＳＭＭＡ）は、その出版物である『せんだいノート』において、東北6県のミュージアムの震災直後の再開状況を調査し公開した。さらに、ＳＭＭＡ参加館を中心に、それぞれの被災の状況と再開へのプロセスをウェブ上（http://www.smma.jp）に公開してきた。それらを踏まえた上で、このパネル展示は、岩手、宮城、福島3県のミュージアムにおいて、震災に関連して起きたいくつかの出来事をとりあげ、テーマごとにその概略をあらためて振り返ろうとするものである。ここで取り上げたことが全体のほんの一部でしかなく、また取り上げ方も言葉足らずで、一面的であるかもしれない点はどうかお許しいただきたい。ミュージアムのみならず、芸術や文化の分野は人々の命や暮らしを直接左右することがないために、緊急時にはともすれば後回しにされざるをえないし、防災上の大きな役割を担えるわけでもない。それでも、この震災を通じてあらためて社会と向き合うことになったミュージアムの、被災から再開へのプロセスを通じて、ミュージアムの社会における存在基盤を見直すきっかけとなれば幸いである。

# 第一章　被害の概要

震災がミュージアムにもたらしたダメージは多様だが、
ここでは、岩手、宮城、福島3県のミュージアムのうち、
被災から再開まで100日以上かかった施設を抽出することで、
被災の概略を把握しようと試みている。

地震、津波、原発事故など、それぞれの被災状況の違いが、
その後のプロセスへも大きく影響していることがわかる。
もちろん早く開館できたところにも重要な記憶が残されていることは言うまでもないし、
この一覧がすべてを語るものでないことをご承知のうえご覧いただきたい。

＊明記のないものは筆者撮影

# 東日本大震災における岩手、宮城、福島県のミュージアム被災状況

再開まで100日以上要した館を抽出
（2015年2月時点で被災・再開状況が確認できたミュージアムを掲載）

●各ミュージアムの名称と位置は2011年3月11日時点のものです

* 震災後に館名を「気仙沼シャークミュージアム」と変更し、再開

** 震災後に移設、館名を「相馬市歴史資料収蔵館」と変更し、再開

■ 東京

**1:** P08
**久慈地下水族科学館 もぐらんぴあ**
⚡ 5- | 🌊 | | ⏻ ?

**2**
**山田町立鯨と海の科学館**
⚡ 5- | 🌊 | ＋ | ⏻ ?

**3**
**釜石市郷土資料館**
⚡ 6- | 🌊 | ＋ | ⏻ 322

**4**
**大船渡市立博物館**
⚡ 6- | 🌊 | ＋ | ⏻ 124

**5**
**陸前高田市海と貝のミュージアム**
⚡ 6- | 🌊 | ＋ | ⏻ ×

**6:** P29
**陸前高田市立博物館**
⚡ 6- | 🌊 | ＋ | ⏻ ?

**7:** P07, 24, 27
**リアス・アーク美術館**
⚡ 6- | — | | ⏻ 504

**8**
**気仙沼リアスシャークミュージアム***
⚡ 6- | 🌊 | | ⏻ 1117

**9:** P12, 23
**歌津魚竜館**
⚡ 6- | 🌊 | ＋ | ⏻ ?

**10**
**おしかホエールランド**
⚡ 6+ | 🌊 | ＋ | ⏻ ?

**11:** P07, 22
**宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン館）**
⚡ 6+ | 🌊 | | ⏻ 967

**12**
**石巻文化センター**
⚡ 6+ | 🌊 | ＋ | ⏻ ?

**13:** P07, 17
**石ノ森萬画館**
⚡ 6+ | 🌊 | | ⏻ 616

**14:** P17
**奥松島縄文村歴史資料館**
⚡ 6- | 🌊 | ＋ | ⏻ 372

**15:** P09
**マリンピア松島水族館**
⚡ 6- | 🌊 | | ⏻ 42

**16:** P18, 23
**仙台市科学館**
⚡ 6- | — | | ⏻ 111

**17**
**東北福祉大学 芹沢銈介美術工芸館**
⚡ 6- | — | | ⏻ 207

**18:** P07, 12, 23
**東北大学総合学術博物館**
⚡ 6- | — | | ⏻ 111

**19**
**仙台市歴史民俗資料館**
⚡ 6- | — | | ⏻ 119

**20:** P19
**社会福祉法人共生福祉会 福島美術館**
⚡ 6- | — | | ⏻ 648

**21**
**福島市写真美術館**
⚡ 6- | — | | ⏻ ?

**22:** P07
**相馬市歴史民俗資料館****
⚡ 6- | — | | ⏻ 1232

**23**
**南相馬市博物館**
⚡ 6- | — | ＋ | ⏻ 150

**24:** P23
**双葉町歴史民俗資料館**
⚡ 6+ | — | ＋ | ⏻ ×

**25:** P23
**大熊町民俗伝承館**
⚡ 6+ | — | ＋ | ⏻ ×

**26:** P14, 23
**富岡町歴史民俗資料館**
⚡ 6+ | — | ＋ | ⏻ ?

**27**
**楢葉町歴史資料館**
⚡ 6+ | — | ＋ | ⏻ ?

**28**
**郡山市立美術館**
⚡ 6- | — | | ⏻ 126

**29:** P09, 17
**環境水族館 アクアマリンふくしま**
⚡ 6- | 🌊 | | ⏻ 125

# 第二章 そのとき、ミュージアムは

# 1 被災直後の状況

## 避難誘導

多くのミュージアムにとって、平日の午後で比較的利用者の少ない時間帯であったが、突然襲ってきた経験したことのないような大きな揺れと、それにともなう展示物の転倒や施設、設備類の破損、追い打ちをかける停電、さらに沿岸部を襲った巨大な津波のなかで、ともかく利用者とともに、それぞれ目の前の危険を回避することに精一杯であったに違いない。今回の震災で、ミュージアム利用者が館内で被災した例は幸いなことに報告されていないが、陸前高田市と石巻市では津波によってミュージアムのスタッフが犠牲となった。

地震や津波を想定した防災マニュアルは、各地域、各館ごとに少なからず用意されていたはずだが、東日本大震災の破壊力は、その想定範囲のどれをも大きく上回るものであった。まして原子力発電所の事故など誰も想像すらできなかった。せんだいメディアテークは、その規模と内容から、大地震を想定したマニュアル作りと避難誘導訓練が義務づけられる施設に指定されていたが、地震の揺れによって火災報知器が誤作動したことで、避難誘導のマニュアルが機能しなかった点は忘れてはならない。マニュアルも訓練ももちろん大切だが、あの日多くの人々がつきつけられたのは、想定をはるかに超える事態に対して、しかもそれが同時多発する状況に対して、それぞれの現場がどこまで適切に対処できるかという問いであった。

せんだいメディアテーク　机の下に隠れる人（2011年3月11日）
撮影：越後谷 出
提供：3がつ11にちをわすれないためにセンター（せんだいメディアテーク）

## 命を守るために

それぞれの居場所も、電気も交通も情報も、とにかく当たり前に存在していた生活インフラのほとんどが破壊され、寸断されたなかで、多くの人々が求めたのは少しでも安全に夜を明かすための避難場所である。比較的頑丈な造りの公共のミュージアムにも、当面の居場所を求めに来る人は少なくなかった。石巻市の宮城県慶長使節船ミュージアム(サン・ファン館)は津波の破壊を免れた展望棟に近隣住民が避難所として5ヶ月以上生活した。同じく北上川の中州にある石ノ森萬画館には、流れついた人や中州を脱出できずにとり残された40名の被災者が最上階のカフェに避難し、自衛隊に救出されるまでの5日間を過ごしている。相馬市歴史民俗資料館(現・相馬市歴史資料収蔵館)は、津波や原発事故による地域の被災者の避難所として約5ヶ月間にわたって使用され、仙台市富沢遺跡保存館(地底の森ミュージアム)には、近隣の住民が避難してきたため、5日間ラウンジを仮の避難所として開放している。そのほか、宮城県美術館や東北大学総合学術博物館では、帰宅困難な市民や学生の緊急避難所としても一時的に場所を提供した。

一方で、ミュージアムにはユニークな構造を持つ施設も多く、使用にあたっては専門家による安全確認があらためて必要であると考えられるケースがあった。気仙沼市のリアス・アーク美術館では、安全確認がとれない状態で避難住民を受け入れることは危険であると判断され、せんだいメディアテークでも、大規模災害時に予定されていたボランティアセンターの設置が、専門家による施設の安全確認を待てないことから見送られ、第二候補の施設に置かれた経緯もある。こうした判断は当然のことではあるが、しかし公共の施設である以上、いざというときには、施設の設置目的や運営上の管理責任を越えて、居合わせた人、通りかかった人の命を守れる場所でありたいし、そのための準備を怠ってはなるまい。社会にだいぶ浸透し、整備が進められてきたバリアフリーのような考え方を、障がいのある人だけでなく「災害時のすべての人」に向け、あらためて拡大して考えていくことも必要かもしれない。

避難した人々の洗濯物が並ぶ
宮城県慶長使節船ミュージアム
提供：公益財団法人慶長遣欧使節船協会

# 2 被害状況の把握と救援への動き

## 翌日から

津波の深刻な被害が及ばなかった地域では、翌朝になるとスタッフや関係者の安否確認や諸々の被害状況の確認が始まる。ようやく事の重大さが少しずつ見えてくるなかで、とりあえず何から手をつけるべきかを考えることになったが、ライフラインが寸断された状態でできることは限られていた。津波被災地を除き、電気が復旧するまで概ね3、4日程度かかっているが、それまでのあいだはほとんど動きのとりようがない状態が続いた。

その一方で、津波が町ごと押し流した地域では、人々はお互いの安否確認もできないまま、いまを生きるための、あるいは助けるための闘いがしばらくのあいだ続くことになった。さらに、11日の夜から緊急事態が告げられていた福島第一原子力発電所は12日、ついに1回目の水素爆発を起こした。半径20㎞以内に出された避難指示によって、人々はとるものもとりあえず家を、職場を離れた。津波により壊滅的な被害を受けたミュージアム、原発事故により立ち入りが制限されることになった地域のミュージアムは、その後4年経過した今も、まだ再開することができずにいる。

この時期、被災地域の最優先課題は、ライフラインの復旧であり、被災した人の救援であり、緊急に設けられた避難所の支援である。したがって公立のミュージアムのスタッフも自治体の職員として、これらの活動に従事し、それは最低限のライフラインが徐々に復旧して避難所のピークが過ぎるまで続いた。

[右]せんだいメディアテーク
休館の張り紙
提供：せんだいメディアテーク

[左]大破した久慈地下水族科学館
もぐらんぴあ
提供：ダナスプランニング

## 展示のライフライン

施設の損壊もさることながら、電源が遮断されたこと、水が使えないことは、とりわけ生物展示を行う動物園や水族館にとって深刻な問題となった。

環境水族館アクアマリンふくしま［右上］

震度6弱の地震、4mを超える津波により、環境水族館アクアマリンふくしまは電源を喪失し、展示生物の多くを失った。38種222点の生物を全国7カ所の水族館・動物園に避難させた。写真は循環が止まった「潮目の大水槽」。

マリンピア松島水族館［左上］

マリンピア松島水族館にも津波が襲い多くの魚が死んだが、発電設備が無事で水槽の被害を最小限に抑えることができた。残ったポンプをあり合わせの道具で修理するなどして、2011年4月23日には再オープンにこぎつけた。

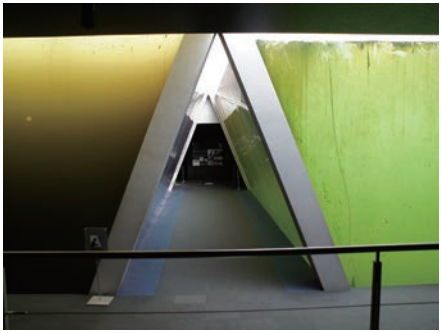
仙台市八木山動物公園［右下］

物流の停止により餌類の納入も止まった。仙台市八木山動物公園は日本動物園水族館協会に餌の支援を要請。支援は2011年3月18日から4月4日まで、4回にわたり続いた。

地底の森ミュージアム［左下］

旧石器時代の遺跡を保存・展示する地底の森ミュージアムは、停電でポンプが止まり、遺跡面が地下水に侵される危険にさらされたが、直前で電気が復旧し事なきをえた。

提供：マリンピア松島水族館



提供：環境水族館アクアマリンふくしま

提供：地底の森ミュージアム

提供：仙台市八木山動物公園

# 3 全国的な支援の立ち上がり

## はじめの一歩

ミュージアムや文化財の被害に関する具体的な取り組みは、まずは生物展示の危機を乗り越えるための緊急の支援に始まり、それぞれの地域の最低限のライフラインがある程度復旧した頃から、ようやくミュージアム全般の復旧に向けて動き始めたと言える。こうした被災地の状況変化に呼応する形で、全国的な支援の動きも始まっていく。

3月の後半になると、情報ネットワークを活用して、被災地のミュージアムの状況確認と情報共有を進める動きが全国的な規模で始まった。インターネット上の情報リンクをリストアップした「東日本大震災 博物館情報(http://japan-museum.com)」や、ミュージアムに限らず、図書館や文書館、公民館などの文化施設の被災状況、さらには支援に関するさまざまな情報の共有をめざす「saveMLAK(http://savemlak.jp)」などが、全国の協力者の力を集めながら情報発信を開始したほか、ミュージアムをめぐるさまざまな団体がそれぞれ被災状況の情報の収集・発信に取り組み始めた。

なお、こうした支援活動を立ち上げていくなかで、いくつかのもどかしさをともなっていたことを忘れることはできない。一つは情報の問題。被災地が実際のところどうなっているか把握できないこと。だからこそsaveMLAKのような活動が真っ先に立ち上がっていたとも言える。二つめは気持ちの問題。遠隔地にあって被災地の状況をつぶさに把握できないなかで、文化の復興が被災者に望まれることなのかという問いに向き合いつつ、今やろうとしていることがその答えであるかどうか自信を持てずに逡巡する人がとても多かった。そして三つめは文化への寄付の問題。日本全国はもとより世界中の人々が復興支援のために多額の義援金を寄せた。その中にはたとえば地域文化やミュージアムの復興支援に使ってほしいといった具体的な目的のための寄付の申し出も少なくなかった。しかしこの時点ではそうした寄付の受け皿が貧弱で、多くの思いをダイレクトに受け、活かすことができなかった。

saveMLAKサイト
提供:"saveMLAK Community"
http://savemlak.jp

「緊急討議 東日本大震災 被災支援とMLAK」会場
2011年4月23日
提供:「ミュゼ」(株)アム・プロモーション

# 4 文化財レスキュー

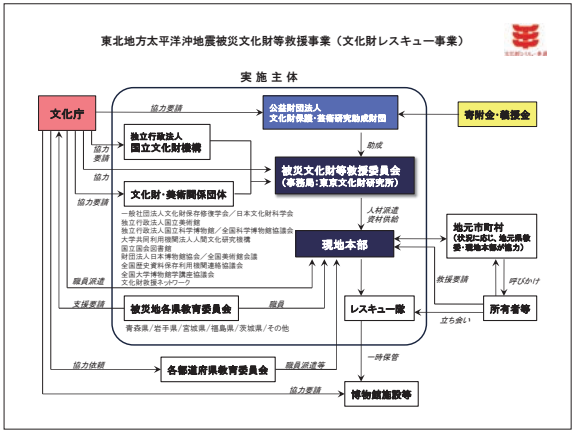
## 文化財レスキュー事業の体制づくり

災害時に文化財の救出が重要であることは、阪神・淡路大震災以降強く意識され、以降、専門家による救援活動のための自主的なネットワークが各地で作られてきた。しかし今回の震災の被害は、過去にまったく経験したことのないもので、これまでのような規模での救援活動ではとても間に合わないことは明らかであった。

2011年3月末には、文化庁が「東北地方太平洋沖地震（※東日本大震災）被災文化財等救援事業」に着手し、国立の博物館や科学館を中心に、日本博物館協会、全国美術館会議、全国科学博物館協議会など、ほとんどの文化財やミュージアムの関連機関が協力団体として参加する形での大規模な文化財レスキュー事業の検討が始まった。

レスキューを進める上での考え方は、その対象として指定文化財やミュージアムの収蔵品だけでなく、地域に散在する歴史、美術工芸、民俗、考古などの資料、さらに自然史標本類や図書資料を含むものとし、それらの救出と応急処置を全国の関係機関と協働して行うものとなった。4月15日には東京文化財研究所で第一回の救援委員会が開かれて正式に事業が開始され、19日には仙台市博物館に宮城県の現地本部も設置された。こうして全国のミュージアムの学芸員がレスキュー活動に参加できる体制が整っていった。

文化庁の枠組みによるレスキュー事業はその後ほぼ2年間にわたって続いたが、そこで行われたのはあくまで応急措置であり、いまだに多くの作業課題が残されている。津波で流されたり、立ち入りが困難となった地域でのレスキューを通じてあらためて確認されたのは、地域の大切な文化財や知的資源の意義や所在について、平常時から分野や専門を超えて情報を共有することの大切さであった。




文化財レスキュー事業の枠組み
出典：文化庁ウェブサイト（http://www.bunka.go.jp/bunkazai/tohokujishin_kanren/pdf/bunkazai_rescue_jigyo_ver04.pdf）

## 地域の役割

文化庁による文化財レスキュー事業と連携、あるいは併行する形で、地域ごと、ミュージアムごと、あるいは有志によるネットワークごとに、自らの力で、地域の歴史資料や文化財を救出しようとする動きもあった。

ＮＰＯ法人宮城歴史資料保全ネットワークは、２００３年に発生した宮城県北部地震を契機に、地域の旧家などに残されている歴史資料を、災害や取り壊しによる消失から守ることを目的に立ち上がった。歴史研究者や文化財関係の専門家を中心とする地元の有志によって活発に活動が行われ、開始後10年で５００軒を超える旧家を調査し、必要に応じて救出も行ってきた。東日本大震災のあとは、文化庁の文化財レスキュー事業の動きとも連携しつつ、これまでの活動の蓄積を活かして、独自のレスキュー活動を進めるとともに、仙台市博物館がみずから取り組むレスキュー活動にも参加するなど、地域連携によるさまざまな活動も進めている。

今回の震災では、自然史の標本資料の被害も多かった。この分野は歴史や美術の分野に比べると公的な専門機関が少ないこともあり、また阪神・淡路大震災のときにこの分野の被害があまり問題にならなかったという経緯もあって、歴史資料のようなネットワークはまだ存在していなかった。そうした中で、いち早く歌津魚竜の化石を救出した東北大学総合学術博物館や、岩手県立博物館による活発なレスキュー活動が目を引いた。

津波で被災した石巻市の本間家土蔵から古文書を救出する、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークの活動
撮影：斎藤秀一
提供：NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク

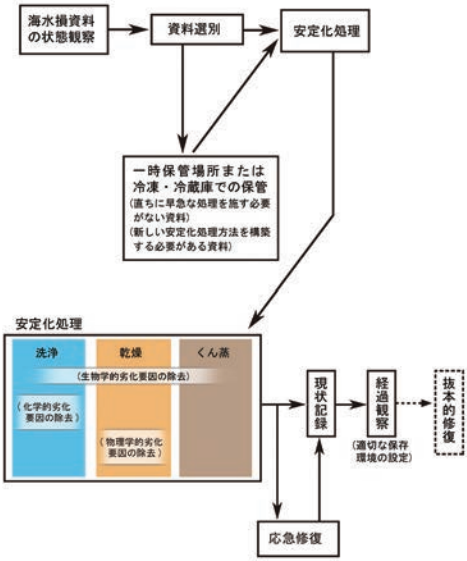
昆虫標本の修復作業
提供：岩手県立博物館

レスキューを待つ昆虫標本
提供：真鍋 真

## 泥とのたたかい

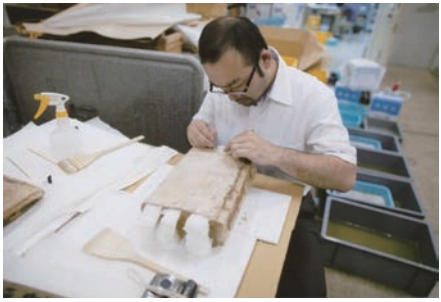
津波によって、海水を含む泥をかぶると、それによって破損や変形にとどまらず、津波が巻き込むさまざまな成分が文化財に付着する。特に水を吸い込んでしまった紙などの素材のものは、放置すればカビや化学変化などの二次被害が起きる。泥や付着物を落とすための水による洗浄、きれいな水に一定時間浸すことによる脱塩、真空凍結乾燥器による乾燥、エタノールやくん蒸処理による殺菌など、保存状態を安定させるために必要な作業は膨大である。

岩手県立博物館にはさまざまな保存処理のための設備も整っているほか、保存科学の専門家が職員として配置されていたこともあり、東京や奈良の文化財研究所と連携して、実際の被災資料についての安定化処理の方法を検証し、被災各地に発信していくという大きな役割を果たした。被災物の量の膨大さと時間との闘いのなかで、専門家ばかりではないたくさんの参加者とともに試行錯誤を繰り返してきた今回のレスキュー活動の経験は、連携という意味でも、技術的な意味でもきわめて重要である。




岩手県立博物館における海水損資料の安定化処理手順

超音波洗浄機による古文書の洗浄



資料点検と内部残留土砂の除去

提供：岩手県立博物館（3点とも）

## さまざまな対応

文化財レスキュー事業による作業が本格化し始めるのは2011年4月中旬以降であるが、夏に向かって気温は上がる一方であった。対処が遅れればそのぶん被害が進行する、まさに時間との闘いの中で、それぞれの現場が、できる範囲で最善をつくすしかなかったのも事実であった。二次被害の進行を抑えるために、救出された資料をまずは民間の冷凍保管庫に保存し、そのまま奈良の文化財研究所に送って真空凍結乾燥処理を行ったものも多い。

一方、原子力発電所の事故により立ち入りが制限された地域の文化財については、レスキュー活動の立ち上げがほぼ一年間遅れた。停電によって保存環境が悪化しその対策が急がれるなか、汚染状況の確認をはじめ、作業の手順や方法についての慎重な検討を行った上で、汚染が基準値内にとどまる資料の梱包と搬出作業が開始されたのは2012年の夏であった。搬出された資料は2015年1月現在、白河市にある福島県文化財センター白河館（まほろん）に保管され、一部は公開されている。

大型真空凍結乾燥機を用いた水損した紙資料の乾燥処置
提供：奈良文化財研究所

被災資料の搬出作業（富岡町）
提供：福島県文化財センター白河館

乾燥した紙資料のクリーニング
提供：奈良文化財研究所

被災文化財復興展「救出された双葉郡の文化財Ⅲ」
2014年10月4日－2015年1月12日
会場・主催：福島県文化財センター白河館

# 第三章

# 再開へ

# 1 施設被害の調査と復旧工事

被災地全体におよぶ無数の建物の被害のなかで、ミュージアムの施設被害の検証や復旧工事に関する技術的な検討は思うようには進まなかった。人命救助やライフラインの復旧が優先されるということもあるが、交通インフラの遮断で東京から来ることすら困難ななかで、なにより対応できる人手が足りなかった。ましてミュージアムのような特殊な構造を熟知し診断できる人材が地元に常駐しているわけではない。はじめはそれぞれの施設がそもそも安全な状態にあると言えるのかということすらきちんと判断できない日々が続いていた。しかしそれでも公立の館は恵まれており、比較的優先的に対応が進んだほか、復旧工事については文部科学省の「公立社会教育施設災害復旧事業」による工事費の一部補助があった。

復旧工事に先立ち、まずは被害状況の詳細な記録作業が始まる。とりわけ文部科学省の補助を受ける場合、工事内容はあくまで震災の被害に対するものなので、それを特定する意味もあった。すべての被災状況を測量棒を使って撮影する作業は慣れない職員にとってはそれだけでも大変だった。最上階の7階の吊り天井が落下したせんだいメディアテークでは、落下原因の検証と同時に、被災前とは異なる改良復旧をすることに対するさまざまな検討が加えられたこともあり、2011年5月に下層階の部分再開を果たしたものの、全館の全面的な復旧工事に着手できたのはその年の秋であった。

せんだいメディアテーク7階 被災状況

せんだいメディアテーク7階 被災状況の写真撮影

せんだいメディアテーク7階 専門家による被害状況の検証

せんだいメディアテーク7階 復旧状況

提供：せんだいメディアテーク（4点とも）

# 2 再開への道

被災直後はミュージアムの企画事業をはじめ文化関連の予算は軒並み停止となり、差し迫った復興関連の経費にまわすことになった。この非常時に、ミュージアムを再開することに対する戸惑いは、ミュージアム関係者の中にもあった。

そんななかで多方面からお見舞いや再開への応援、寄付の申し出などが多数寄せられたこともミュージアムの背中を押した。ミュージアムとして復興に貢献するためには、まずみずからを立て直すことが前提であり、それこそが今スタッフが取り組むべき事であると思えるようになった。震災直後の茫然自失の状態から、徐々に復興のスピード感、明るい話題が求められ始めるなかで、仮に完全復旧はできなくとも、部分的にでもよいからできるだけ早く再開しようという方向にかじがきられた。

再開の日は、待ちかねたようにたくさんの人々がやってきた。電力事情などもあって、開館時間の短縮や、館内の照明の節電が行わるなど、震災の爪痕が随所に残ってはいたが、それでも訪れた人々の表情には、またもうひとつ、以前の日常が戻ってきたことの静かな歓びがあふれているようだった。環境水族館アクアマリンふくしまの再開では、避難先で生まれたゴマフアザラシの赤ちゃんが「きぼう」と名付けられた。津波被害の大きい地域にある石ノ森萬画館の再開には一年半以上の時間を要したが、再開へのプロセスは町の復興のシンボルとすらなった。

津波による泥で覆われたホールだったが、それから20ヶ月たった2012年11月、開館を祝う人々でいっぱいになった。
提供：石ノ森萬画館

東日本大震災から126日目、2011年7月15日にアクアマリンふくしまは再オープンした。当日は再オープンセレモニーを開催し、入館口には開館を待ち望む人々が列をつくった。
提供：環境水族館アクアマリンふくしま

奥松島縄文村歴史資料館のある里浜では、蕎麦を作ってミュージアムの復興を応援しようという活動が、多くの学者や文化人によるプロジェクトとして立ち上がった。
提供：奥松島縄文村再生プロジェクト実行委員会（奥松島縄文村歴史資料館）

震災当時、メスのゴマフアザラシ「くらら」は妊娠中であった。2011年3月16日に千葉県鴨川シーワールドへ避難し、4月7日に無事出産。6月26日に親子で帰館し、子どもは「きぼう」と名付けられた。2013年6月、ブリーディングローンのため青森県営浅虫水族館へ搬出。
提供：環境水族館アクアマリンふくしま

# 3 文化における支援や協働

震災後は、芸術文化のさまざまな分野で、被災地の人々を慰め、勇気づけるための大小の企画が大量に立ち上がり、被災地に持ち込まれた。震災前には考えられなかったような頻度で大型の公演が開催され、一流のアーティストや人気のスターたちが被災地を訪れた。同様に、被災地の拠点となるミュージアムでも復興支援と銘打った大型の展覧会が続々と開催されてきた。

一方、文化財レスキューがそうであったように、ミュージアムのスタッフがネットワークを活かして協働で活動を行う動きもある。こども☆ひかりプロジェクトは、全国のミュージアムのスタッフや支援ボランティアが兵庫県立人と自然の博物館を拠点にネットワークをつくり、被災地のこどもたちのためにプログラムを持ち寄る活動である。この活動を通じて大学生が館や地域の枠を越えて参加できるしくみ作りにも取り組んでおり、ミュージアムの意義を外に向けて開いていくための新しい可能性を見せていると言える。震災後、多くの学生が地域のボランティア活動に積極的に参加し、その活動の場のひとつとして、ミュージアムや文化財レスキューなどがあったことも、学生の参加をうながす大きな力となったとも言えるが、こうした動きを絶やすことなく大切に育てていけるかどうか、ミュージアムは問われている。

特別展「若冲が来てくれました──プライスコレクション 江戸絵画の美と生命──」
2013年3月1日–5月6日
会場：仙台市博物館
主催：「若冲が来てくれました」仙台展実行委員会、財団 心遠館、日本経済新聞社
提供：仙台市博物館

東北三都市巡回展「ルーヴル美術館からのメッセージ：出会い」
2012年6月9日–7月22日
会場：宮城県美術館
主催：ルーヴル美術館、宮城県美術館
提供：宮城県美術館

「こども☆ひかりフェスティバルinせんだい2013」2013年6月8日
会場：仙台市農業園芸センター／主催：こどもひかりプロジェクト

震災復興・国立科学博物館コラボミュージアムin仙台「アロサウルスがやってきた！」2014年3月18日–4月20日
会場：スリーエム仙台市科学館／主催：国立科学博物館、全国科学博物館振興財団、スリーエム仙台市科学館
提供：スリーエム仙台市科学館

東日本大震災復興祈念特別展「奈良・国宝室生寺の仏たち」
2014年7月4日–8月24日
会場：仙台市博物館
主催：大本山室生寺、「奈良・国宝室生寺の仏たち」実行委員会
提供：仙台市博物館

# 4 長い道のり

震災後ミュージアムにもたらされたさまざまな支援の成果は大きいが、当然ながらいつまでも続くわけではない。被災地のミュージアムは支援をバネにしつついかにしてこれからの活動を立て直していくかが問われている。

一方で、公的支援の枠組みに入りにくい民間の小さなミュージアムには、特別の困難があった。仙台市にある福島美術館は、福島禎蔵氏の古美術コレクションを公開する民間の施設だが、施設や展示品の被害に対する対応が困難となり、宮城学院女子大学による人的支援や、みずから取り組んだ募金活動によって2012年の12月にようやく再開を果たしている。

ミュージアムの多くは大小を問わず、たくさんの人々の歓迎のなかで再開の日を迎えることができたが、利用者数は、一部を除いて、震災前よりも少なくなっている館が多い。とくに福島県では、原子力発電所の事故の影響もあって、水族館のような集客力の大きい館であっても利用者は思うように伸びない状況が続いている。ミュージアムの運営は、財政的な問題もあって震災前からたくさんの課題を抱えていた。公的施設に民間事業者の資金やノウハウを導入する取り組みも進んできたが、短期的なカンフル効果はあっても、ミュージアムが社会で果たすべき長期的なビジョンや持続可能な運営モデルを描けているわけではない。

2009年に立ち上がったSMMAは、こうした状況をミュージアム個々の問題にとどめず、地域の文化的、知的資源としてあらためて繋ぎ合うことによって、地域にとっての新しいミュージアムのあり方を示していこうという取り組みでもある。さらにそれをミュージアムにとどめることなく、図書館や、地域のさまざまな教育機関との連携を広めることでさらに強化していけるのではないかと考えている。

津波で壊滅的な被害を受けた館や、原子力発電所の事故によって立ち入ることができない館は、いまだに再開の見通しもたっていない。ミュージアムの問題にとどまらず、地域全体をまきこんだ被災であればこそ、地域のミュージアムとして何を学び、そのなかから地域における確固たる存在意義を見いだすことができるかどうかが問われているのではないだろうか。

「七福絵はがき」募金
提供：社会福祉法人共生福祉会 福島美術館

福島美術館支援のお願い
提供：全国美術館会議、社会福祉法人共生福祉会 福島美術館

# 第四章 ミュージアムにできること

# 1 展覧会という手法

震災以降、ミュージアムにあっても、震災にどう向き合っていくかは、きわめて重要かつ繊細な課題となった。社会に知識や文化を伝え、広めていくことを使命とする以上、震災についてそれぞれの専門の立場から語ることは、すべてのミュージアムにとって当然の責務である。再開を果たした被災地の館に限らず、全国のミュージアムがそれぞれの立場や方法で震災をとりあげることによって、震災のありようを伝え、広めるための努力をしている。展覧会だけでなく講演会、シンポジウム、見学会などさまざまな取り組みがあったが、ここでは展覧会として行われたものをかいつまんで紹介する。

## 災害を現象として学術的にとらえる

地震と津波と放射能によるこれほどの被害を「想定外」としてきた私たちであったが、今回の被災を通じて、考古学や歴史学のなかに、予測しうる根拠が隠されていたことを知った。東北地方の太平洋側では、1000年前にも同規模の災害があったこと、さらに400年前にもそれに近い津波があったこと、東海道より南に想定される地震と津波は、東日本大震災を上回るものになる可能性があることなど、地震や津波のメカニズムだけでなく、過去の災害の歴史に学ぼうとする機運が急速に高まった。

「歴史にみる震災」2014年3月11日–5月6日
会場・主催：国立歴史民俗博物館
提供：国立歴史民俗博物館

「それでも生きる！ 考古学から見る災害のあと」
2012年10月12日–12月2日
会場・主催：地底の森ミュージアム
提供：地底の森ミュージアム

企画展「蒲生干潟の今・昔」
会場・主催：スリーエム仙台市科学館
2012年12月2日–2013年2月15日
提供：スリーエム仙台市科学館

## 災害を地域史、文化史の視点からとらえる

東日本大震災をきっかけにみずからの地域の震災について、その後の復興の歴史を含めて振り返る企画も各地で行われた。また、津波によって失われた街並やくらしを紹介する企画も多くの共感をえた。

「東日本大震災と気仙沼の生活と文化」は気仙沼の民家からレスキューされた資料を軸に、また「牡鹿半島・海のくらしの風景展」は牡鹿半島でレスキューされた民具を通じ、さらに「RE：プロジェクト記録展」は、仙台市沿岸部での住民への聞き取り調査記録などをもとにして、それぞれ震災前の生活文化を紹介した。震災後については多くの記録が残されつつあるが、震災直後の生活を振り返る「はじまりのごはん」はささやかだがリアルな記憶として関心を集めた。

「東日本大震災と気仙沼の生活と文化」2013年3月19日–9月23日/会場・主催：国立歴史民俗博物館
提供：国立歴史民俗博物館

「牡鹿半島・海のくらしの風景展」2014年10月11日–26日
会場：宮城県慶長使節船ミュージアム/主催：東北学院大学博物館
提供：東北学院大学

「3月12日はじまりのごはん――いつ、どこで、なにたべた？――」2014年10月1日–11月16日/会場：せんだいメディアテーク/主催：NPO法人20世紀アーカイブ仙台、3がつ11にちをわすれないためにセンター（せんだいメディアテーク）
提供：3がつ11にちをわすれないためにセンター（せんだいメディアテーク）

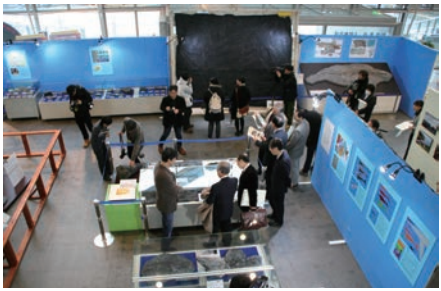
「RE：プロジェクト記録展 被災地を想う/被災地から考える」
2014年2月5日–28日/会場：仙台市役所本庁舎1階ギャラリーホール
主催：仙台市、公益財団法人仙台市市民文化事業団
提供：RE:プロジェクト事務局

## 文化財レスキュー活動の紹介

ミュージアムの魂ともいえる収蔵品を泥から救い出す文化財レスキューの活動についての報告も多い。被災状況やレスキューのようすを紹介しつつ、救出された資料の展示も行うことで、文化財レスキューの活動が単にミュージアムの救援活動にとどまらず、地域のアイデンティティをよみがえらせ、失わないための闘いとして、全国の専門家や多くのボランティアの助けを受けながら続けられていたことが紹介された。とりわけ原子力発電所の事故によって立ち入りが制限される福島県双葉郡の資料館から救出され、白河市内に仮保管されている文化財の展示には、特別の意味があるだろう。

また、石巻文化センターからレスキューされた、地元出身の彫刻家、高橋英吉の作品が宮城県美術館で展示され、駆けつけた多くの石巻市民を勇気づけたことも記憶に残る。

「震災からよみがえった東北の文化財展」
2012年2月26日–3月11日 会場：都立中央図書館
2012年3月16日–3月28日 会場：遠野市立博物館
主催：「震災からよみがえった東北の文化財展」実行委員会
提供：遠野文化研究センター



「復興 南三陸町・歌津魚竜館」2012年2月7日–3月25日
会場：仙台市科学館
主催：東北大学総合学術博物館、仙台市科学館、宮城県南三陸町
提供：東北大学総合学術博物館

「救出された双葉郡の文化財」2013年3月7日–6月9日
「救出された双葉郡の文化財2」2014年1月18日–3月23日
「救出された双葉郡の文化財3」2014年12月1日–2015年1月12日
会場：福島県文化財センター白河館
主催：財団法人福島県文化振興財団

「東日本大震災1年 資料レスキュー展」
2012年3月6日–25日
会場・主催：仙台市博物館
提供：仙台市博物館

## 震災とアートがどう向き合えるかという問い

多くのアーティストが被災地に入り、純粋にボランティアをすることを含めてそれぞれの活動を模索し続けていた。そうしたアーティストたちの活動のようすを紹介し、震災とアート、すなわち災害がもたらす状況と、人の表現行為もしくは表現者という存在が、どう向き合えるかを考えようとする企画も多かった。せんだいメディアテークが２０１２年に開催した「志賀理江子 螺旋海岸」展は、震災を直接テーマにする企画ではないが、制作地が津波の甚大な被害を受け、そのことが作品制作の大きな構成要素あるいは背景となった企画としても注目を集めた。

東日本大震災復興支援
プロジェクト展
「つくることが生きること」
2012年3月11日–25日
会場：アーツ千代田3331
主催：わわプロジェクト
提供：わわプロジェクト

「3.11とアーティスト：進行形の記録」2012年10月13日–12月9日
会場：水戸芸術館現代美術ギャラリー／主催：公益財団法人水戸市芸術振興財団
提供：水戸芸術館現代美術センター

「震災と表現 BOX ART～共有するためのメタファー」
2014年9月17日–11月3日
会場・主催：リアス・アーク美術館
提供：リアス・アーク美術館

「記録と想起・イメージの家を歩く」より中村友紀『宮城県名取市北釜集会所』展示風景
2014年11月15日–2015年1月12日／会場：せんだいメディアテーク
主催：公益財団法人仙台市市民文化事業団
撮影：越後谷 出／提供：せんだいメディアテーク

# 2 収集し、保存して未来に伝えること

ミュージアムは、必要な資料や文化財、作品を収集し、広く公開するとともに、未来に伝えるために保存する役割をもつ。その意味では、震災の記録を収集し広く公開するのは、第一義的にはミュージアムの仕事である。しかし、既存のミュージアムにはそれぞれ収集するべき対象が決まっていて、それに含まれないものを扱えるような弾力性は、人的にも施設的にもないのが実情である。

震災に関する記録としては、写真記録、映像記録、震災に関する掲示物、ちらし、行政資料、遺物、遺構などがあり、またそれぞれに現物資料とデジタルアーカイブなどの複製可能資料の違いもある。さらに地域ごと、職場や学校ごと、団体ごと、いや細かく言えば一人ひとりが、それぞれの記憶や思いがあり、伝えたいことは異なるし、伝えたい相手、伝える手法なども異なるはずだ。今回の震災の広域性と被害の複雑さを考えればなおのこと、それらのひとつひとつを手際よく、より多くの人に伝えることなど不可能に近い。

震災は私たちにとって特別のことだが、長い時間が経過すればいずれは歴史のひとこまとなる。それを風化と呼ぶのならそうかもしれないが、本来それは自然なことでもある。忘れないための大きな何かを作ることも必要かもしれないが、むしろ私たちの日常が巨大な災害の可能性を常に孕んでいることを、静かな備えとして日々の暮らしの中に織り込めるようにするほうが大切かもしれない。そのために取り組まなければならないことを地域全体で共有したうえで、それぞれの得意分野や守備範囲を活かしながら分担するという考え方がとれないだろうか。地域のことは地域の人、特定分野のことはその専門の人に関わってもらい、伝える技術を持つ人が記録をまとめていくといった形で協働するのである。問題はこのような取り組みの全体を、どのように調整し、分担するかである。

震災から4年、震災の記録の収集や活用については、それぞれの立場でできる範囲のことを進めてきたが、残念ながら全体を俯瞰し調整をする機能はまだどこにもない。機会があれば、ミュージアムはみずからの専門性を活かしつつ、図書館や公文書館、デジタルアーカイブ、各被災地域のコミュニティと連携して、震災の記録と活用についてどうするべきか、積極的に提言し、リードしてほしい。

# 3 語り続けるために

私たちの思いや記憶は、一人ひとりの命の中にしか存在できないし、また他者の思いや記憶を直接知ることもできない。それを乗り越えるために、身振りがあり、言葉があり、さまざまな表現がある。そしてそれらを形として定着させるために、文字やイメージ、そしてさまざまな方法による記録がある。それによってこそ、私たちは遠い祖先や、遠く離れた人の思いや記憶を、自らの記憶や思想として引き継ぐことができる。文化とは、私たちが私たちであるための必須条件となる、このようなしくみのことをさしているということもできるだろう。

そんなしくみのひとつであるミュージアムは、展示物すなわち、知識や記憶や思いがなんらかの形で定着した「もの」を人々に公開し、過去から未来に引き継いできた。しかし震災は、私たちの知らないことがいかに多いかをあらためて見せつけた。ミュージアムに蓄積された知も、私たちが住む世界のほんの一部分しかとらえられていないことを思うとき、単に定説や評価の定まったことがらを普及啓蒙するだけではない、ミュージアムのもうひとつの役割が見えてくるのではないだろうか。

わからないことを示すこと。さまざまな意見や考えのあることを示すこと。あるテーマについて語りあい、聴きあい、さらにそれを蓄積し深めること。展示された「もの」が、そんな新しい知や考え方の可能性を開き、知の循環がはじまるきっかけとして機能するような、場としてのミュージアム。

この震災を通じて、そのような新しいミュージアムのあり方を予感させる事例がいくつかあった。

せんだいメディアテークの
部分再開にあわせて開催されたイベント
「歩きだすために」(2011年5月3日–8日)
撮影：越後谷 出
提供：せんだいメディアテーク

## あえて、思いを語ること

再開後のリアス・アーク美術館が常設展示として公開している「東日本大震災の記録と津波の災害史」は、被災状況の記録写真や津波によって流された被災物といった生々しい展示物で構成されている。特徴的なのは解説文である。記録写真に付されたキャプションには、通り一遍の説明だけでなく被災前の記憶を交えた当時の思いが綴られている。瓦礫のようになった被災物についても、ものにまつわる思い出が、それぞれの人の言葉で綴られている。ひとつひとつの写真や被災物から、人々のさまざまな暮らしぶりや思いが甦る。饒舌ですらあるその語りは、実はすべて美術館の学芸員によるもので、展示物につけられた言葉は厳密にはフィクションである。客観的な説明をよしとするミュージアムの展示にあって、こうしたフィクションを交えた説明文を付すことはきわめて異例だが、それによって震災のもつ意味と、それについて語ることの意義が、はるかに深く、見る人に伝わっていると言えるだろう。

「自転車 2011.12.1 気仙沼市梶ヶ浦」

おじいちゃんに買ってもらった自転車。マウンテンバイク。4年生になった時に買ってもらった。それまではね、お兄ちゃんのおさがりだったから、初めて新品で買ってもらったやづだったよ。うんとねぇ…12段変速だった。坂道も登れだよ。

おじいちゃんねぇ…船、海に出すって言って、地震の後、港に行った…
ん…帰ってきてない。まだ分んない。お父さんが探しに行ってる。

また自転車に乗りたい。

2011年4月5日、気仙沼市仲町の状況。JR南気仙沼駅のホーム。気仙沼市民にとってJR気仙沼線は仙台方面への移動手段として欠くことのできない重要な公共交通手段だった。特に高齢者や学生にとってはまさに日常の足だった。土日には通称「お買いもの列車」と呼ばれる8時台の仙台直通列車に乗り、17時台仙台発の便で帰ってくる。おしゃれをした若者が、ロゴの入った衣料品店の袋を下げて列車を降りてくる。

「東日本大震災の記録と津波の災害史」会場風景

提供：リアス・アーク美術館（3点とも）

## 見る人が語りはじめるきっかけとして

牡鹿半島にある地域の民俗資料収蔵庫のレスキューを担当した東北学院大学博物館は、収蔵庫の資料が家々と一緒に流されてしまったこともあって、レスキューしたものが何かを特定できない事例が多くならざるをえなかったという。不明な資料について地域の人にヒアリングをしながら、あらためてタグをつけていく作業をする中で、ヒアリングに応じた人々のあいだにある変化があった。知っている民具の使い方など説明したり、わからないものについて仲間と議論したり、謎解きをしたりするうち、はなしはどんどん広がって、その土地の暮らしぶりやそれぞれの人生について次々と語り始めたのである。文化財の来歴に直接関わるかどうかは別にして、文化財が、それ自体が何かを伝える存在としてではなく、人々がそれぞれ、地域の暮らしや文化について語り始めるための重要なきっかけとして機能したことの意味は大きい。

また、「失われた街」模型復元プロジェクトは、建築を学ぶ学生の実習を兼ねた取り組みとして神戸大学を拠点に始まった。津波で失われた街並や集落を、５００分の１の模型で再現し、そこに地域の人々の記憶をのせていくのである。はじめに学生たちが資料をもとに白い模型を作る。それをそれぞれの地域に持ち込んで、人々と共に「記憶の街ワークショップ」を行い、家の屋根に色をぬったり、それぞれの場所のさまざまな思い出や記憶を、記憶の旗として模型の上に配置していく。模型の上にぎっしりと立てられた思い出の旗には、ひとつひとつに故郷への思いが込められ、いつまでも見飽きることはない。ここでは模型が人々のふるさとへの思いを喚起し、語りを引き出す重要なきっかけとして機能しているのである。

「牡鹿半島のくらし展 in 仙台──再生・被災文化財──」会場でのヒアリング
提供：東北学院大学

「牡鹿半島のくらし展 in 仙台──再生・被災文化財──」でヒアリングの内容とともに展示される資料
提供：東北学院大学

「記憶の街ワークショップ in 志津川」の様子
提供：「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会

「記憶の街ワークショップ in 志津川」記憶の旗

# おわりに

震災のあと、はじめての夏が近づいてくるころ、津波で故郷の街を失い、避難所や仮設住宅で生活する人々のあいだで、故郷の地域の祭礼に付随する民俗芸能を復活させようとする動きが始まった。道具が流された地域も多く、もとよりこの非常時にお祭りをやることに対する戸惑いもあるなかで、祭りを復活させることは容易ではなかった。それでも沿岸部の各地で、死者を弔い復興を願う地域の行事として、民俗芸能を復活させる活動が次々と立ち上がっていった事実は、東日本大震災を語る上で忘れることのできないエピソードともなった。それによって、人々は震災で断ち切られた過去や地域との関係をもういちど繋ぎ直し、自分たちがどこから来て、誰と何を共有できるのかを、すなわちみずからのアイデンティティのありようを、あらためて確認することができたのだろう。

似たようなことは、ミュージアムの世界でも起きていた。ミュージアムの再開や地域の文化財の救出は、人々を明るくし、それぞれのアイデンティティを思い起こし支える力となった。さらに、震災によってミュージアムを失いかけたことで、わたしたちは単に施設がミュージアムなのではなく、私たちや地域のアイデンティティを守る役割を担う社会的機能こそがミュージアムの実体であったことにあらためて気付いた。

震災を通じて学んだ、防災の教訓、災害による犠牲者をすこしでもなくすための教訓を世界に、未来に確実に伝えていくことが大切なのは言うまでもない。しかし伝えなければならないこと、忘れてはならないことはそれだけではない。当たり前だったはずのものが突然奪われ、あるいはその姿を変えたとき、あらためて見えてきた、本当に大切なことへの気付きである。ミュージアムが危機にさらされたときに垣間見た、ミュージアムの真実の意味を忘れてはならないし、つかみかけている新しい可能性を見失ってはいけない。このことをそれぞれのミュージアムはもちろん、地域のミュージアムの連携体であるＳＭＭＡとしても、常に心がけていかなければならないと考えている。

「博物館資料を持ち去らないでください。
高田の自然、歴史、文化を復元する
大事な宝です　市教委」
（被災した陸前高田市立博物館の中におかれていたメモ）
提供：遠野文化研究センター

## 主要参考文献（発行順に掲載）


- 『記憶表現論』笠原一人・寺田匡宏編／昭和堂／2009年3月
- 「〈緊急特集〉東日本大震災とミュージアム」『ミュゼ』第96号／pp.10-21／2011年5月
- 「〈特集〉つながるミュージアム――東日本大震災を超えて――」『ミュゼ』第97号／pp.10-23／2011年8月
- 「[特集]文化財の保存と再生」『カルチベイト』第38号／2011年11月
- 『2011.3.11大地震大津波を語り継ぐために――声なきものの声を聴き、形なきものの形を刻む――』
  みやぎ民話の会叢書第13集「第7回みやぎ民話の学校」の記録
  第7回みやぎ民話の学校実行委員会編／2012年3月
- 『震災復興と無形文化――現地からの報告と提言――第6回無形民俗文化財研究協議会報告書』
  東京文化財研究所無形文化遺産部／2012年3月
  http://www.tobunken.go.jp/~geino/pdf/kyogikai_report/06mukeikyogikai_report.pdf
- 『被災地の博物館に聞く 東日本大震災と歴史・文化資料』国立歴史民俗博物館編／2012年3月
- 『東日本大震災と図書館』（図書館調査研究リポートNo.13）国立国会図書館／2012年3月
- 『東日本大震災に係る鎮魂及び復興の象徴となる都市公園のあり方検討業務報告書』
  国土交通省都市局／2012年3月／http://www.mlit.go.jp/crd/park/joho/dl/fukko/
- 『記憶と記録 311まるごとアーカイブス』（叢書 震災と社会）長坂俊成／岩波書店／2012年4月
- 『津波のまちに生きて』川島秀一／冨山房インターナショナル／2012年5月
- 『「3.11震災伝承研究会」第1次提言――震災遺構の保存について――』3.11震災伝承研究会／2012年7月
  http://www.thr.mlit.go.jp/kokudo/pdf/henkou/yuushiki2/004_teigen.pdf
- 「「特集」文化による復興」『カルチベイト』第39号／2012年9月
- 『東北地方太平洋沖地震 被災文化財等救援委員会 平成23年度活動報告書』
  東北地方太平洋沖地震 被災文化財等救援委員会／2012年10月
  http://www.tobunken.go.jp/japanese/rescue/report/index.html
- 『東日本大震災復興支援プロジェクト つくることが生きること』
  中村政人（発行者）／一般社団法人非営利芸術活動団体コマンドN／2012年10月
- 『アートのチカラ、いわてのタカラ 3.11以降私たちがしてきたこと』岩手県立美術館／2013年3月
- 『災害発生から地域コミュニティ再生に至るまでの社会教育関係者及び社会教育施設の役割に関する調査研究報告書』
  文部科学省／2013年3月
- 『特集展示――人間文化研究機構連携展示 東日本大震災と気仙沼の生活文化 図録と活動報告』
  国立歴史民俗博物館／2013年3月
- 『ミュージアム被災状況と復旧プロセスに関する調査報告書』
  仙台・宮城ミュージアムアライアンス／2013年3月
  http://www.smma.jp/survey/report/h24_smmareport.pdf
- 『東北地方太平洋沖地震 被災文化財等救援委員会 平成24年度活動報告書』
  東北地方太平洋沖地震 被災文化財等救援委員会／2013年5月
  http://www.tobunken.go.jp/japanese/rescue/report/index.html

- 『語ろう！文化財レスキュー 被災文化財等救援委員会公開討論会』
  東北地方太平洋沖地震 被災文化財等救援委員会／2013年6月
  http://www.tobunken.go.jp/japanese/rescue/report/index.html
- 『福島第一原発観光地化計画』（思想地図 βvol.4-2）東浩紀編／ゲンロン／2013年11月
- 「特集 震災とミュージアム」『芸術批評誌［リア］』第31号／1-110頁／2014年2月
- 『企画展示 歴史に見る震災』国立歴史民俗博物館／2014年3月
- 『災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査報告書――文化的コモンズの形成に向けて――』
  財団法人地域創造 2014年3月／http://www.jafra.or.jp/j/library/investigation/24-25/data/24-25_1.pdf
- 『ミュージアムのサステナビリティに向けて 被災から復旧、再開へのプロセスの課題とネットワークを軸とした仕組みづくり』
  坂口大洋／2014年3月／http://www.smma.jp/survey/report/SMMAreport_jp.pdf
- 『リアス・アーク美術館常設展示図録 東日本大震災の記録と津波の災害史』リアス・アーク美術館／2014年4月
- 『東日本大震災美術館・博物館総合調査報告』全国美術館会議／2014年5月
- 『提言　文化財の次世代へ確かな継承――災害を前提とした保護対策の構築をめざして――』
  日本学術会議史学委員会文化財と活用に関する分科会／2014年6月
  http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t193-6.pdf
- 「震災被災物の言葉を紡ぐ――文化的記憶を再生するために――」
  『仙臺郷土研究』復刊第39巻第1号（通巻288号）／山内宏泰／22-27頁／2014年6月
- 『「失われた街」模型復元プロジェクト 失われた街／記憶の街』
  「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会／2014年9月
- 『仙台市震災復興メモリアル検討委員会報告書――東日本大震災の記憶と経験を未来へ、世界へ、つなぐ提言――』
  仙台市震災復興メモリアル検討委員会／2014年12月
  http://www.city.sendai.jp/fuzoku/__icsFiles/afieldfile/2014/12/24/houkokusyo_1.pdf

- 『東日本大震災・ミュージアム関連情報サイト MUSEUM ACTION』
  インターネットミュージアム事務局
  http://www.museum.or.jp/action/

東日本大震災とミュージアム

会期：2015年3月14日(土)−3月18日(水)
会場：せんだいメディアテーク
主催：仙台・宮城ミュージアムアライアンス

執筆・監修：
佐藤 泰(仙台・宮城ミュージアムアライアンス運営委員長)
編集：
仙台・宮城ミュージアムアライアンス事務局
翻訳協力：
有限会社ファーステック
デザイン：
松井健太郎
印刷：
株式会社仙台紙工印刷
発行：
仙台・宮城ミュージアムアライアンス
〒980-0821 仙台市青葉区春日町2-1(せんだいメディアテーク内)
tel: 022-713-4483/fax: 022-713-4482
URL: http://www.smma.jp
2015年3月14日発行

●無断複写・転載を禁じます。

平成26年度文化庁地域と共働した
美術館・歴史博物館創造活動支援事業

SMMA
SENDAI MIYAGI MUSEUM ALLIANCE
仙台・宮城ミュージアムアライアンス

**仙台・宮城ミュージアムアライアンス(SMMA)**

仙台・宮城地域のさまざまな博物館が共通の知的資源として協働することで、地域にとってより有益な機能を獲得していくための共同事業体です。各館の学芸員や専門職員が持つ知識やノウハウを集積し、分野を横断した連携イベント、学校教育への協力や地域で活動する人材の育成支援、観光資源の開発など、単館では実現困難な新たな価値の創出を行い、地域のニーズに合った新時代のミュージアムとなることを目指します。

——

SMMA参加館：スリーエム仙台市科学館、仙台市縄文の森広場、仙台市天文台、仙台市富沢遺跡保存館(地底の森ミュージアム)、仙台市博物館、仙台市八木山動物公園、仙台市歴史民俗資料館、仙台文学館、せんだいメディアテーク、東北大学総合学術博物館、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館、宮城県美術館
(2015年2月現在)

この報告をまとめるにあたり、参照させていただいた多くの資料や文献の執筆者はじめ関係者のみなさま、写真等の資料をご提供いただいたみなさま、さらに制作中に頂戴したたくさんのご指摘に、心より感謝申し上げます。紙面の都合上、また制作側の力不足により、取り上げる事象に偏りや不足が生じた面もあるかと思いますが、どうかご容赦ください。
なお、仙台・宮城ミュージアムアライアンスは、東日本大震災におけるミュージアムの被災状況と復旧プロセスに関する調査に今後も継続して取り組んでまいります。今後の調査活動に活かすため、この報告についてお気づきの点がありましたら、ご教示くださいますようお願いいたします。